

目次

影印編 1

翻刻編 131

研究編 175

資料解説 177

小考 「稽古三弦」の登場人物のことば―特に武士の言葉・母と娘の会話について― 189

付記一 「ソダネー」に思う 193

付記二 さ・ぜ・ぞ 195

付記三 義太夫の稽古のこと 197

濤林言古三弦卷之上

江戸

式亭三馬原稿

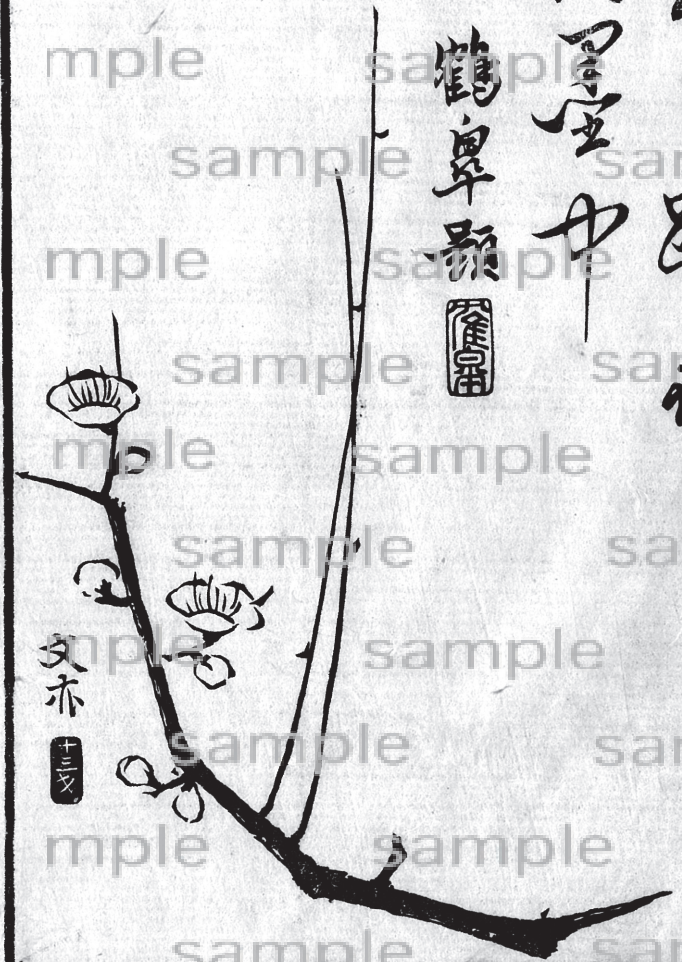
第一計

弓矢のめりたる秘伝のめり
と直してさし流し番のめり

一間の出格子三尺の用は、お親の丹減ま光る。
連枝窓の紋尽く、い、こ、ち、ん、や、の、お、ま、子、ら、ら
竹届けらら口の障子の切張る。角木瓜の
角と張流し。腰張りの石揚。お接の時す

密と疎花
漫筆中

鶴泉 齋



文亦

十三

はりあけ。エへま、よ猫の皮ト。

古今亭

三鳥誌

(口ノ三裏) 〈図〉

(口ノ四表) 〈図〉

(口ノ四裏) 〈図〉

(口ノ五表) 〈図〉

(口ノ五裏) 〈図〉

* 図中に「密々疎花 瀑墨中 鶴阜題」

(上一表)

風ノ流 稽古三弦卷之上

江戸 式亭三馬原稿

第一計 弓矢にあらぬねらいの的は／それてきた引番のけいこ

一間の出格子三尺の開きは。母親の丹誠に光り。／連枝窓の紋尽しは。てうちんやのお弟子から／付届け。うら口の障子は切張りに。角木瓜の／角を張潰し。腰張りの石摺は。お梭の時すり

(上一裏)

はがし。入口の掛札。中銅壺より光り。墨くろく／と。姓名を額はしたるは。檜物町へ五節句に南一づゝの

名取なるべし としのころ二十三でつふりとして／いろ白く。小もんつむぎの小そでに しまとあさぎの男 おびをぐる／とまきよふじをつかいながら五奴／のたばこを。朱らうの長ぎせるでのみながら。はなうたを うたつてゐる。こなたに母親としのころ六十一二。まつざかじまのわた入に。ちりめんの／つき／のどぶぎ をうへ、ひつかけ。今くつたちやづけちやわんをあらい ながら。ながしのあわびかいのなかにあるかわらのか けを／見てなにか小ごとをならべかけるもつとも昼すぎとみへたり 母親おひよこ「コウおやきや。ちつと氣をつ けねへよ。きんによふてめへが薬罐をあれへなつた時。おふかたこの瓦でみげへ

(上一表)

たんだらう。ホンニおめへにやアこまるよ おやき「なんだへか、さん。わつちがなによふをしたとへ 母親「何 じやアねへわな。てへげへしれたもんだア。この瓦で薬罐をこすりちらかしたらう。とふりでうまれかわつた やうに薬罐がひかるとおもつたら。ばか／＼しいたま／＼事をすりやア。ろくなこたアしねへヨ。いつまでも 子供じやアあんめへし。ほんとうに氣を付ねへよ おやき「それだつてもおちねへからじれつてへ

(上一裏)

ものをいひじやアねへかナ 母親「コウそふいふとてめへそんな事をいふが。いひことをナニいふものかな お やき小ごへ／にて「やかましいヨ 母親「なんだと おやき「なにもいやアしねへわなト きせるを火ばちの／ ふちでとん／＼と叩く 母親「コウおやきなんぞといふとよウくつん／＼するが。それで人中へ出られるもんか ナ。こねへだものん太夫さんのおされへにいきねへ／＼といふのに。酢だのこんにやくだのといつて。とう／＼ いかねへじやアねへか。そのときおれが何と